

言語計画論としてのターミノロジー理論

佐々木由香

Terminology as a language planning theory

Yuka Sasaki

In Japan, topic of terminology is seldom discussed in the context of language planning. However, terminology, including systematical neologism, standardization and compilation of science and technology terms, is not only an important component of corpus planning in typically developing countries. It also has often to do with status planning in bi- and multilingual societies.

After a brief introduction of representative topics of language planning, we review the doctoral dissertation of E. Wüster, who is regarded as a "father" of terminology. As we see, his "theory" was first conceived as a kind of international language-planning program. He regarded different conceptual systems of terms as a hindrance of communication, which was to be eliminated. He proposed methods for compiling terminological collections, deciding on a unified conceptual system, and standardizing terms based on definitions of concepts with the help of national and international standardization bodies. He aimed at introducing one common international auxiliary language at last. This disputable final object of Wüster is rarely recalled today neither by those working for standardization nor those compiling terminology, not to mention computer application designers. Nevertheless, not few people follow the tenets and proposed practices without questioning their validity and applicability. Some ISO standards authorize them, too. Moreover, some authors assert that in case of terminology, a concept is language-independent and corresponds to one and only one term in each language, concluding that equivalents in different languages are also to match. The objective of Wüster's language planning is here asserted as the status quo. A statement of this kind is often found in technical writings in the last two decades, including manuals of terminological databases and proposals for data exchange format. Possible causes and consequences of this still need to be investigated.

A review of some writings presented here reveals that social, political and economical factors are involved in the theory and methodology of terminology largely. Scientists and engineers dealing with the topic of terminology should therefore be aware of this interaction and examine the validity of asserted principles and the applicability of methodological proposals to their own purposes.

1. 発表の概要

今日の日本では、ターミノロジーをめぐる議論が言語計画の文脈でなされることは少ない。しかし、専門用語の組織的な造語、体系化、標準化、用語集や辞書編纂は、近代化を目指す国家がその言語政策のなかでしばしば取り上げる重要なテーマであるとともに、先進工業国か発展途上国かを問わず、多言語使用地域・国家・国際社会において特定言語の地位と機能の決定と実体化に深く関わることの多いテーマである。

本発表では、言語計画でよく焦点となる話題を簡単に説明した後、ターミノロジー理論の「父」と目されている E. ヴュスターの博士論文（1931）をとりあげ、彼の「理論」がもともと一種の国際的な言語計画プランとして構想されたことを紹介する。ヴュスターは複数の用語体系の併存（一言語内では類義語の存在、複数言語間では対応語のずれに端的に表れる）は、効率的なコミュニケーションの障害であり取り除かれるべきだと考え、用語を収集・整理する方法、収集した用語をもとにその裏にある概念体系を図示する方法、併存する概念体系を統一する方法、それに基づいて用語を標準化する方法、そのような施策実現のための公的な国内・国際標準化機構の設立などを提起した。博士論文では、このような経過を経て国際的な概念体系の標準化がすすめば、究極の目標である単一国際補助言語の導入への道がつけられるとしている。（彼はその候補としてラテン語、英語、エスペラントの三言語をあげ、エスペラントを推奨する。）

ヴュスターが最終目標とした単一国際補助言語構想は今日ほぼ忘れ去られているが、彼がその目標のために提案した方法論と下敷きとなっている理論は、多少の改変は加えられながらも、今日なお用語標準化、用語集編纂、用語データベース設計などに携わる多くの人々に支持され、関連 ISO 規格にも盛り込まれている。採用する理論および方法論が、科学的に妥当なものなのか、またそれぞれの目的に合致したものなのか、という検討はかならずしも充分になされていないと思われる。さらに、80 年代ころからの興味深い現象として、「概念」は言語に依存せず、概念と用語は一対一で対応するものである（したがって異言語間の対応語も一対一で対応する）との主張を所与の事実ないしターミノロジー理論の原則（理論上の真実）としてあげる文献が少なからず現れてきている。ヴュスターが言語計画の実現目標としてあげた状態を、事実と読み替えているわけである。発表者の印象では、用語データベースのマニュアル、用語データ交換フォーマットの規格提案など、技術的な文献にこの種の表現が多い。なぜ、どのような動機から、そして実証データも理論上の確たる裏付けも無しに、この「読み替え」が行われるようになったのか、また、この論が各国の標準化団体に支持されることによる社会的影響、それに基づいて用語データベースなどの言語情報システムが設計されることによる影響はどのように現れてくるのか、といった点については、今後の考察と調査が必要であろう。

本発表のねらいは、1930 年代から現在に至るいくつかの文献を見直すことによって、現在のターミノロジーの理論と方法論には、社会的、政治的、そして経済的な要因が密接に関わっていることを示唆することにある。そのような要因から中立であることを目指す科学者、技術者であっても、この点を踏まえて、ターミノロジーの理論と方法論の妥当性を再検証する必要があると思われる。

2. 資料

2.1. 言語計画

言語計画とは

「そのもっとも典型的なかたちでは、ある共同体（主に国家や地域共同体）内部で用いられている言語や変種の体系とその運用のありかたに、その共同体の中で拘束力を付与されている公的な機関が、ある一定の目標（一般的には言語を取り巻く諸問題の改善）を目指して、組織的に人為的な統制を加えること」（真田 92）

言語計画の構成・焦点

- 席次計画・言語地位計画（status planning）

どの言語（ないし変種）にどのような社会的機能を与えるか

<公用語、国語、（初等・高等）教育用言語、文学用言語、宗教用言語、職業現場の使用言語、国際機関使用言語、他>

- 実体計画・語彙拡大計画（corpus planning）

目的の機能を果たすようにその言語（変種）をどのように変更するか

<文字化、文字改革、標準化（標準語の採用）、近代化（科学技術用語、メディア用語、書き言葉の文体確立、法律用語の簡略化など）>

- 普及計画：以上の計画をどのようにして普及させるか

2.2. ヴュスターの 1931 年論文

章ごとの要旨

1. 工業技術は自然法則の経済的な応用。言語も図面や記号と同様の道具で、経済性が重要。工業技術用語は「目的言語」であり、また、なければならない。そのために第一次世界大戦後国内で技術用語の標準化が始まった。
2. 全世界の言語の中で、電気工学分野で重要なのは英語、ドイツ語、フランス語、さらに、ロシア語、イタリア語、スペイン語。（発電量、文献量から）
3. 名辞の形態分析（要素語への分解と、その「音声形」と「概念体」の分析）とその経済性の検討により、個々の民族言語の特性を知ることができる。言語の経済性は、正確さ（語と意味の一対一対応）と快適さ（覚えやすさ）を基準に測ることができ、それによって言語の品質（等級）が決まる。
4. 民族言語は、かつては工業技術分野でさえ無秩序に変化していたが、これは非常に不経済なことであった。第一次大戦後、先進工業各国で工業技術用語の標準化が行われ、多くの名辞が規格によって始めて作られた（用語の中央提案）ことは、喜ばしい。
5. 記号には略語（名辞から派生）と言語に依存しない記号があり、経済性の観点から異なった特質がある。

6. 工業技術概念の国際標準化は三段階（各々三ステップ）で行われるべきである。第一段階（各国語間での用語の意味の対比、意味の統一、概念体の統一）では、他国語と名辞の概念が対応するように、各国内で国語の用語概念定義をする。この段階では各国語の用語自体は変わらない。
7. 第二段階では、国際的に綴りや発音が同じ記号や名辞を個別に採用する。
8. 第三段階では、国際補助言語を完全に採用する。候補となるのはラテン語、英語、エスペラントであるが、経済性（正確さ<歴史が短いため多義語が少ない>、快適さ<覚えやすい>）と公平性の観点からエスペラントが望ましい。概念定義が国際的に明確になっており、すでに国際的な規格組織を有している電気工学分野からこの計画を始めるのが妥当である。

2.3. 関連文献

真田信治、渋谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹 (1992)

『社会言語学』、桜風社

フロリアン・クルマス (1987)

『言語と国家 -言語計画ならびに言語政策の研究-』山下公子訳、岩波書店 (Coulmas, Florian: "Sprache und Staat: Studien zur Sprachplanung und Sprachpolitik" 1985 Walter de Gruyter & Co., Berlin の翻訳)

Wüster, Eugen (1931/1970)

Internationale Sprachnormung in der Technik, besonders in der Elektrotechnik (Die nationale Sprachnormung und ihre Verallgemeinerung), dritte, abermals ergänzte Auflage, Bouvier u. Co. Verlag, Bonn, 1970 <技術分野の国際言語標準化：特に電気工学分野に関して（国語標準化とその一般化）第3版【初版発行：1931】>

Felber, Helmut (1984)

Terminology Manual, UNESCO and Infoterm, Paris

Termnet (1989)

Terminology in Advanced Microcomputer Applications

Sonneveld, Helmi B. and Loening, Kurt L. (ed) (1993)

Terminology: applications in interdisciplinary communication

ISO/R 704 (1968): Naming Principles

ISO 704 (1986): Principles and Methods of Terminology

ISO/DIS 860 (1996): International Harmonization of Concepts and Terms

ISO/R 1087 (1969): The Vocabulary of Terminology

ISO/DIS 1087 (1996): Terminology Work – Vocabulary – Part 1: Theory and Application

ISO 10241 (1992): International Terminology Standards – Preparation and Layout